

Photo 1. ひめ沼の浮島

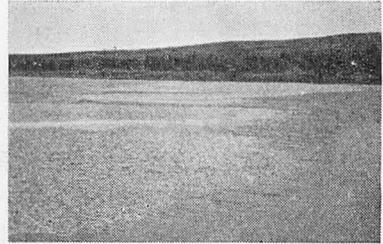


Photo 2. オタドマリ沼にみられるヒツジグサ群落

水性猪水型の沼で、またその近傍一带は蘚苔植物群を主体としたいわゆる泥炭性湿原を構成するもので、従つて水質も茶褐色を帯びた酸度の高いもので、またその中に検出される藻類も

Cosmarium, *Staurastrum*,
Scenedesmus

を数うるに過ぎない非調和型の特徴をあらわしている。この点まえに述べた《ひめ沼》とはいちじるしい対比がみられるわけである。

広さの点から考えても《ひめ沼》の約三倍の大きさをもつこの沼、ことさらにその生物層の貧弱さから幾分のものたりなさを感じさせるこの沼にもひとつの楽しみがある。それはこの沼の一端にくりひろげられた《ひつじぐさ》の群落である。開花季におとづれる採集者にとってはことさらにそれは、孤島利尻のひとつのなぐさめともなつてくれよう。(旭川東高等学校)

デンマルクの一 日

山 田 幸 男

昨年7月14日から18日迄ノールエーのトロンドハイム市において第2回国際海藻専門討議会が開催され、それに出席する為7月7日の未明に羽田を發ち途中独乙のWilhelmshavenに立寄つた後26年振りにデンマルクのコペンハーゲン市を訪れた。同地には昭和4年約1箇月程滞在して当時植物博物

館で仕事をしていた Dr. BOERGENSEN の許で勉強したことがあつたので私にとつては誠に懐しい思出の都である。尚同地の大学の植物学教室には Prof. ROSENVINGE が在世中での有名な *Phyllophora Brodiaei* と *Actinococcus subcutaneus* の仕事をしていられた。当時のその助手 Dr. SÖREN LUND が今近郊 Charlottenlund の水産研究所で仕事をして Prof. ROSENVINGE の後をついでいる。それであるから私は此度この会議へ出席出来ると決つた時早速 Dr. BOERGENSEN にも Dr. LUND にも手紙を出して是非お目にかかり度いと申送つた処喜んで御待ちするとの返事をもつた。唯 Dr. BOERGENSEN からは自分は今 Hellebaek に住んでいるが已に老齡なのでコペンハーゲン迄出かねるから此地へ訪ねて呉れないかとの事であつた。Hellebaek は此の前にも招かれた事があるので是非お訪ねすると返事を出しておいた。

昔の汽車や汽船による悠長な旅とちがつて飛行機の旅は全く手つ取り早い。7月7日の未明に羽田を発つたスカンジナビヤ航空会社の飛行機は8日の夜には独乙のハンブルグに着いた。そこで翌9日には Wilhelmshaven へ行つて其の地に泊り、10日の夜にはもうコペンハーゲンへ着いて了つた。早速航空会社で予約して貰つたホテルへ行つた所が既に Dr. Lund の置手紙があつて明日午前9時に又訪ねて来るから宿で待つていて呉れ、一諸に Hellebaek に Dr. BOERGENSEN を訪問し様とあつた。

翌11日天気は好い。早く目が覚めたが6時前に起床して早く朝食をすませ、附近を散歩する。宿は繁華な中央ステーションの直き傍なので非常に賑かでの附近は昔と余り変らず歩いていると段々25年の昔を思い起す。人道には丁度シーズンとみえて苺を沢山売つている。大きな、実に見事なもので特に大きなものは直径3寸位のものがある。9時前宿に戻つて待つていると間もなく Dr. LUND が来て呉れた。そして Hellebaek へは午後行く事にしてあるから午前はこれから直ぐ自分の試験場へ案内仕様というので直きに一諸に出かける。この Charlottenlund というのはコペンハーゲンの北の郊外で中央ステーションから電車で30分内外。昔の王様のお城で実に気持ちの好い場所にある。同氏はここ algologist で librarian を兼ねている由で library 其の他を見せてもらう。尚同氏は目下グリーンランドの海藻をやつている由でそのマヌクリプトを見せて呉れたが色々と非常に面白いものがあるという事であつた。それから再び市中にもどりレストランで昼食の御馳走になる。丁度附近のカナダの領事館に奉職中の夫人も来て食事を共にする。夫人に

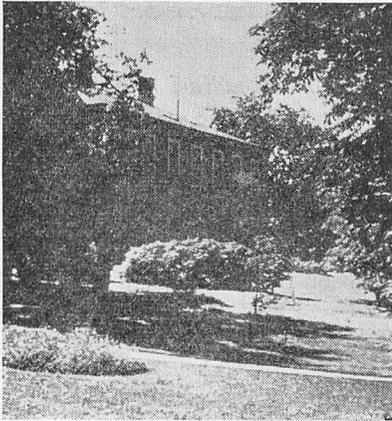


Fig. 1. Copenhagen の Botanical Museum. 植物園の一隅にある。

は初対面である。食後夫人に別れて Dr. LUND の案内で愈々 Hellebaek へ向う。その処から約1時間電車で Helsingör 迄行き田舎の小さな汽車にのり替え間もなく目的地に着く。大した待合室もない小駅で静かなブナ林の中にある。駅には Dr. BOERGESEN の令嬢が迎えに来ていて呉れた。此の前来た時に矢張りこの駅まで迎えて呉れた令嬢で当時10歳位の子供であつたが今では立派な一人前の婦人である。静かなブナ林の間の径を通つて4,5分で裏門の前へ出る。そこから立派な庭園に入った所主人は白い日よけの帽子を被つて庭まで出て見えていたので26年振りで対面をした。非常に喜ばれ、自分も大変に嬉しかつた。直ぐに庭を案内説明して貰い宅に行く。玄関前には夫人も迎えられ今日は天気が好いから外でお茶を用意したとの事で海に面した木蔭でお茶のもてなしにあずかる。色々話はずんだが矢張り年齢で主人は余り語られず夫人と令嬢がしきりに取りもたれる。途中で主人は小生のみをさそつて書齋に入り先般から手紙で論じ合つていたマウリチュウス産の *Gelidiopsis scoparia* の件に就いて話合つた。これは同博士が此種に同定された標本の写真が自分にはどうしても此の種とは思われないので其の旨を書送つた処早速同博士の考えを云つてよこされ、爾来何回か手紙をやりとりしていた問題であつて、これは結局自分が帰りにパリーに立寄る際その Montagne の Type specimen を見た上最後の決定を仕

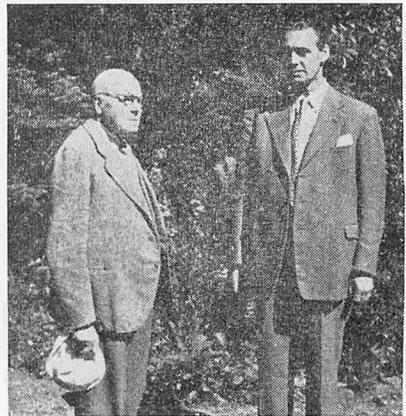


Fig. 2. Dr. F. BOERGESEN と Dr. SÖREN LUND。Hellebaek の Dr. BOERGESEN の庭園にて撮す。

様という事で落付いた。それから又皆の席に帰つて団欒に加つたが暫くして令嬢は我々を誘つて前の海岸に降りた。一带の砂浜で海水浴には適当な場所である。*Fucus vesiculosus* や *Ahnfeltia plicata* 等が打揚げられている。此辺は対岸のスエーデンに近い処でその家々が近くに見える。再び庭にあがり家に入つてうながされる儘に訪問者名簿に署名をした。主人は古い名簿を繰つて自分が以前に此所を訪れた時の署名を見せて呉れた。1929年7月7日東京山田幸男とある。そしてその大きな古風



Fig. 3. Dr. SÖREN LUND と Dr. BOERGENSEN の令嬢。Dr. BOERGENSEN の庭園にて撮す。

な室でディナーのもてなしに与つた事を思い出す。愈々皆に別れを告げて令嬢から庭の話をききながら沢山に咲き揃つた花等を見ていると主人が又出て来られてリンネ草が咲いているとて自らその花をとつて手渡されたので之を受けて手帳の間に挿んだ。何しろ此の庭は立派なもので実に色々な種類の植物



Fig. 4. 第2図と同。

が世界名地から好く集めてある。ヒマラヤのものも多い。クリンソウ其他サクラソウ類の東洋のものも尠なくない。丁度花盛りである。ヒマラヤ産の *Mechonopsis* の1種が大きなルリ色の奇麗な花をつけているのが目をひいた。嘗つて依頼を受けて態々札幌から送つた石燈籠が池の畔に立っている。段々にコケが付いてよくなつたという。又メタセコイヤの苗も見事に育つて高さ既に1丈にもなる。以前コペンハーゲンの博物館で仕事をしていた際或朝自分の机の上に Dr. BOERGENSEN の簡単な

メツセーチを記した名刺に添えて咲きたてのオホヤマレンゲの清々しい一花が添えてあつた事も忘れない。後できくとこの苗はもう50年近く前に故遠藤吉三郎博士から送られたものだという事であつた。とも角此の庭を見る為に Sweden の王様も何回かここを訪問されたとの事である。再び主人に左様ならを告げて停車場へ赴く。この令嬢はいつも客の案内をされるらしく世界各地から此の地を訪れる藻類学者を好く知つていて、停車場で汽車を待つ間その噂等をした。聽て汽車が来たので令嬢に別れて Dr. LUND と二人でコペンハーゲンに帰り今度は Dr. LUND の宅に行く。夕飯に招待されているのである。夫人は已に帰宅して用意をして我々の来るのを待つて呉れた。奇麗なアパートで気持の好い住居である。話によるとコペンハーゲンも御他聞にもれず住宅難でこの様なフラットを借りるにも仲々容易でないと言う。夫人心尽のおいしい料理の御馳走になり食後苺が出たので今朝町で見た大粒の苺の話をした処、近頃どんどん大きいのが出る様になつたが余り大きいのは見た目は好いが味は余り好くないとの事であつた。食後又シェリー酒等のみ乍ら亡くなつた Prof. ROSENVINGE 其他各国藻類学者の噂、パリーの植物学会の話、先年出席したエチンバラの第一回国際海藻専門討議会の話、それからつい先日帰つたスペインへの旅の話等をしている内に大分夜も更けたので別れを告げ宿に帰つた。然し空は未だ全くは暗くはならない。丁度夜明け前の様に彼方の空はうす明るい。

日本を發つてから僅か数日、二十数年も互に相見なかつたなつかしい人々に会い、古くにならんだ土地をふむ事が出来て過した楽しい一日は今となると又夢の様な気がしないでもない。 (北海道大学理学部植物学教室)

北米南加大學の Allan Hancock Foundation に於ける海藻研究廢止さる

Pacific Science Association の太平洋植物学委員会に属する藻類小委員会の最近の報告(1955年10月11日附發送の小委員会第1報)によると、表題の研究所は今まで活潑に行われていた海藻の研究を、他の海産生物研究の大部分と共に、打ち切ることになつたことは甚だ遺憾であり、Dr. DAWSON のメキシコ沿岸の海藻フロラの報告も完結を見ないことになるのは最も不幸なことであると記している。かつて同博士来道の際、HANCOCK 氏が近頃テレビジョンに凝つていて海洋生物の研究は将来どうなるか心配だと洩らしてお